

# 故郷第二場面 読んだ読んだ

明るく日の朝早く、わたしはわが家の表門に立った。屋根には一面に枯れ草のやれ茎が、折からの風になびいて、く「おまえが着くおよその日取りは知らせておいたから、いまに来るかもしれない。」

主人公は変わり果てた家を目の前にして、自らのふがいなさを感じた。また、母親の気遣いからも、申し訳ないという気持ちで主人公の気持ちを沈めていく。しかし、そんな母親も、苦しい現実、お金のない現状を直視する覚悟がなく、話題を持ち出せないでいる。親子の逃げ腰な様子が読み取れる。

さん

主人公は表門に立ち、草の生えた屋根を見て、家主がすっかりしていないからと、母に申し訳なく思い、また母もそんな主人公に気を遣って明るくふるまい、二人が気を遣い合って引越しの話を避けていたが、とうとう引越しの話になったとき、お金に余裕がなく金の話ばかりをしていたが、母がレントウを話に出して無理矢理明るい話題にしようとするところから、現実から目を背けようとしているということが分かる。

さん

主人公は枯れ草がやれ茎となった家になるまで放置した自分や、母に気を遣わせ親孝行できない自分を惨めに思い、申し訳なさを感じている。母も主人公に気を遣い、二人ともなかなか引越しの話をせずにいやなことを後回しにした。やっと本題に入っても、母は明るい話題にしようと、いやなことから逃げるのだった。

さん

主人公は、枯れ草のやれ茎や母のやるせない表情を見て、自分がみじ

三年四組

氏名

めで申し訳ないと感じている。母は、主人公を座らせ、休ませ、茶を注いでいることから、引越しの話から逃げていることがわかる。主人公も母も、最後にはレントウの話で明るくしようとしていて、二人とも引越しという暗い話題を避けていて、逃げようとしていることが分かる。

さん

主人公は門を見て、おそらく寂しい、申し訳ないと思ったはずだ。この家は、何年も放棄されて、草だらけだった。気を遣う母は、あえて引越しの話をせずに、主人公を座らせ、休ませ、お茶を入れ、主人公を落ち着かせた。そして、引越しの話になり、次の家を借りて、道具類全てを売って新しい家具を買い、お金には余裕がなかった。しかし、母はそんな落ち込んでいる主人公に、レントウの話をして、暗い話題から明るい話題にもっていった。

さん

主人公は自分の家に帰ってきたが、帰郷したばかりの時に見た現実と同じような状態になっている家があり、お金がなくて放置されていたことが分かる。そして、主人公の母がやるせない表情をしているのが主人公には見えて、自分に責任を感じている。また、申し訳ない気持ちになっている。

さん

主人公は、自分の家の門に立ったとき、親戚の人たちがいなくてひっそり閑として寂しくて、枯れ草が風になびいてその草を取ったりする金もないことなどを悲しいと感じている。主人公は、普通親孝行をするときなのに、親を悲しませて気を遣ってもらっている。二人とも引越しの話をしないし、レントウの話にそらしたりして逃げている。

さん